

日本大学桜門建築会

2008-March  
No.81

# 桜建会報



▲1958年に第1回桜建賞を受賞した成瀬嘉一氏の卒業設計「工芸大学」の外観パース

◀2007年度日本建築学会作品選奨を受賞したマブチモーター・プロジェクト (写真提供/前田啓介氏)

<http://www.okenkai.jp/>

## contents

巻頭言/卒業おめでとう 加藤幸三—2

特別寄稿/若い人たちへ—3

池田富士男 成瀬嘉一 原澤一仁 前田啓介

事務局だより—13

2007年度斎藤賞・加藤賞・桜建賞受賞者一覧—14

学部ニュース—15

# 卒業おめでとう

加藤幸三 (桜門建築会会長)



NTTファシリティーズ副社長沖田章喜氏を迎えて実施した2007年の講演会風景



竹中工務店本店の建築視察



特別維持会員懇親会に出席した小嶋勝衛日大総長と齋藤公男日本建築学会会長



京都・知恩院の改修現場を視察

2007年度本学を卒業、修了される皆さん、おめでとうございます。皆さんは、十数年にわたる厳しくも楽しい学びの時を経て、これから企業戦士として、また、専門学徒として次のステップへ進まれることに大きな期待を込めてお祝いを申し上げます。

皆さんが、活躍を目指す建築界は、構造偽造問題や談合など、未だ癒えない後遺症に加えて、大手建設会社の施工不良やメーカーの不正が発覚、あるいは許認可の停滞など、さらに混迷を深めています。こうした社会的不信感の解消、信頼回復には、産・官・学が総力をあげて取り組み、早期に確実な成果をあげることが望まれ、各界のさまざまな努力が傾注されつつあります。

皆さんにとっては厳しい船出となりますが、バブル崩壊後の低迷期を乗り越えた建築界には、皆さんの活躍の場が十分に用意されています。

桜門建築会には、皆さんの恩師をはじめ5000人の先輩がいます。建築界の多くの分野で活躍しており、その経験を豊富に積んだ人たちが、仕事に余暇にほどよいコミュニケーションの輪を広げています。すでに入会されている新卒業生を含め、多くの仲間が皆さんの入会を心から歓迎したいと思っています。

桜門建築会は、85年の歴史をもつ、大学系建築会では、もっとも伝統のあるOB会です。左の写真のように、講演会、懇親会、新旧建物視察の他にも各技術系懇談会、旅行会、桜建サロンなど多彩なコミュニケーションが皆さんをお待ちしています。

桜門建築会には、「和をもって大きな輪をつくらう」という良き伝承があり、これは日本大学の建学の精神でもあります。皆さんとともに、良き伝承のもと、「和の輪」をもっと広げていきたいと願っています。



Katou Kouzou

1937年東京都生まれ。60年、理工学部建築学科卒業後、梓設計に入社。95年、同社取締役社長。2003年同社取締役会長を経て退社。1996～98年は日本建築学会副会長。2000～02年は東京都建築士会事務所協理。現在、ティ・エス・エスの取締役社長を務める。

## 若い人たちへ —OBからのメッセージ—

桜建会報81号は、平成20年3月本学を卒業あるいは修了する学生の皆さんを対象に編集している。特別寄稿では、社会に出る、あるいは進学する後輩の皆さんに向けてのメッセージを4名のOBにお願いした。

寄稿いただいた成瀬嘉一氏(昭和33年工一部卒)は、第一回桜建賞を受賞された方であり、「最近の若者は絵が描けない人が多い」とされ、ものをしっかり見るためには自ら描いてみることの重要性を述べられている。コンピュータに描いてもらうことを当たり前のこととして使っている今日の若い世代にとって、大いに参考になると思う。

同様に、池田富士男氏(昭和42年理工卒)は、早稲田大学の武基雄研究室に入室を認められ、建築家としての武基雄氏の設計作業に関わり、「もっとも効果的な伝え方は、教授の設計を横で見ることであり、論理だけでなく徹底的に遣りながら肉体的に覚えこむ」こととし、正に実学教育の実践の重要性を述べられている。メディアを通し表層的に建築を学び、教授の実際の設計に携わる様子を学内で見ることの稀な今日の学生諸君にとって、これらの実践は建築教育上でもっとも欠けている部分でもあろう。

前田敬介氏(平成元年生産工院卒)は、2007年度建築学会作品賞を受賞されたOBである。本稿では、IT時代に対応した建築設計プロセスの手法により、クライアントにファシリテーター・マネージメントによって設計者として最高のサービスを提供する重要性を述べられている。しかし一方、自らが在学中学んだ歴史を基礎にした論理性の構築、及び実践教育の地道な経験が基本であるとされている。

原澤一仁氏(平成4年工卒)は、今日わが国で建築界に留まらず、さまざまな業界に多発する「偽装問題」を取り上げ、日本固有の倫理観が欠落していると共に、衝突を前提とした西欧型契約社会と異なる、お互いの信用に基づく和の精神の社会の崩壊による危機が到来していることを述べられている。また、真理追究がエンジニアの使命であり、日本固有の倫理感の復活に必要であるとされている。(坪井善道/広報委員会委員長)

### 特別寄稿

## 今、建築界に何が求められているか 池田富士男

### 建築家教育

1961年(昭和36)「(建築家・人と作品) 早大建築科の核心・武基雄」論(註1)が雑誌に掲載されたとき、迷える建築青年だった私は、嘆願書のような一通の手紙を武教授に差し出した。当時は、建築史家(註2)も指摘しているように「一級建築士受験資格の取得に必要なカリキュラムの構成によって」学部段階では、いわゆる「建築家教育」など成されておらず、ましてや「職能教育」などは、どこの

大学の講座にも求めるすべはなかった。

「武研究室」は、そんな状況下で大学における「人材の養成機関」としての役割を果たし、いく多の若手建築家を輩出して優れた建築作品を生み出してきた。(註3)

「建築家教育は、教えられることと伝えなければならないことがあって、伝えることは教わる側が教授から盗みとらねばならないことである」、「もっとも効果的な伝え方は、教授の設計を具体的にすぐ横で見ることができ

ること。そして論理だけでなく肉体的に覚え込むこと、一緒に作業して見せることが有効な教育となる」。(註2)

### 教えない教育

この栄光の武研究室に入室を許可された私は、しばらく後に、教授の次のような宣言(マニフェスト)を聞いた。

「諸君たちは学生ではない。したがって私には教える義務はない。自分たちで大いに発奮してやりたまえ」

「教えを乞いに来た」私としては愕然たる気持ちとなった。しかし「自由に遣る場を提供しよう、教えないが一人前の建築家として扱おうぞ!」という武教授の意図は、後になってわかったことである。

連日連夜、コンペに明け暮れた深夜のことである。武教授は、「設計とは、とことん考え、やってみることを経験しておけば必ず上達する」と述べられた。

### 発奮

後年、畏友である建築家からの祝辞(註4)の中に、同じ話を聞いたことがある。

「学生の頃の話などを…、当時、建築のデ

ザインに関しましては、早稲田の方々では大先輩の錚錚たる素晴らしい先生が頑張っている(註5)、私は愕然としまして、これは…叶わないかな…と、私たちは大いに発奮したわけでございます」。

### 若い世代に

建築学会記念講演会会場において(註6)、勇気あるハタチの青年が、「これから建築の世界に入ろうとする者ですけど、若い世代にメッセージを…」と質問した。(会場に笑い)

「今は非常に価値観の多様な時代でありまして、個性を十分に発揮できる時代でもありますから、自分がいいと思うことを自分の価値観にしたがって、自由奔放にやっていた方がいいんじゃないかと思います。しかし、それが成功するか、人に認められるか認められないか、あるいは、一年二年の間認められなかったけれども、二十年先には認められるかそれは私にはわかりませんが、自分ももっともいいと信ずるものをおやりにすることが、いちばんいいことだと思います」。

### 卒業設計

若者に圧倒的支持を得ている建築家の講演



(註4)大隈会館にて、在りし日の建築家・丹下健三氏と武基雄氏(昭和57年6月24日 撮影/池田富士男)

(註7)を聞いた。「…そのバイタリティはどこからくるのか」の私の質問に対し、「常に考えているということがバイタリティになっている。建築という学問を学ばなかった私にとっては、一つひとつの仕事を『卒業設計のつもりで遣らなければならない』と思っており、常に緊張感と勇気をもって新しいものに挑戦できる限りは…、と思っております」。

**建築家の「マインド」と「モラル」は、21世紀に入った現在、いっそう明確にしていかなければならない「職能」のひとつである。**

### アーカイヴス(註3、註8)

尾張町は現在の銀座四丁目付近。服部は現在の和光であり、その一筋裏の一室に昭和10年、前川國男が事務所を構えた。武と詩人の立原道造が石本喜久治事務所で席を並べようになった翌年には、丹下健三が東京大学建築学科を卒業し、前川事務所に籍を置くようになる。

丹下は大学では設計の課題が提示されると、ル・コルビジェの作品集を抱えて街を歩き、構想を練ったと伝えられるが、当時の交

友について自伝『一本の鉛筆から』(日本経済新聞社)で次のように述べている。

「早稲田の建築科の人ともよく交流した。武基雄さんとも同年輩で、なかなかの論客であった。早稲田には当時、佐藤武夫先生ら建築デザインの先生が多く、先輩としては村野藤吾先生がすでに華々しい活躍をされていた。ところが、東大の内田祥三先生は構造の大家、超高層の世界的権威の武藤清先生も、むろん構造がご専門でデザインは若い岸田先生がお一人で頑張っているという状況だった。… こうしたあたりをよくとらえて、武さんはよく、『丹下さん、デザインの方は早稲田に任せておけよ、東大の諸君は構造をやってくれればいい』などと言っていた。私は当時からデザイン志望であったから、これには半分ギャフン、半分なくそというところであった。いずれにせよ、武さんには随分と啓発されたし、勉強への意欲も吹き込んでもらったと思っている。

昭和13年(1938年)に大学を卒業後も、暇さえあれば武さんや立原さんら若手が入り乱れて議論したり遊んだりし、学生時代の延長のような一面もあった。」



Ikeda Fujio

1940年静岡県生まれ。67年日本大学理工学部建築学科卒業、早稲田大学建築学科武基雄研究室助手。71年よりイムス建築設計事務所所長。建築家、一級建築士。78年神奈川県建築コンクール最優秀賞受賞。日本建築家協会・本部職能委員会委員、東京建築設計監理協会理事、日本建築設計監理協会連合会・機関誌「設計監理」編集長、日本建築家協会関東甲信越支部幹事、早稲田大学講師、日本大学理工学部大学院講師を歴任。

### 註

1. 川添登、『室内』、1961年11月号
2. 『建築家教育の現状と課題』、近江栄・日本大学教授、ガラスGA、1981年5月号
3. 『建築家・武基雄と早稲田大学・武研究室の記録』、2000年6月30日
4. 「武基雄先生叙勲のお祝いの会」祝辞・丹下健三博士、大隈会館、1982年6月24日
5. 村野藤吾、今井兼次、佐藤武夫
6. 「これからの文明と建築」講師—丹下健三、堺屋太一、草月ホール、1986年4月
7. 「建築家の責任」講師—安藤忠雄、日本大学理工学部9号館講堂、2000年10月
8. アーカイヴス、学生時代からの畏友、丹下健三氏と武基雄氏。(註4)

卒業設計の思い出

私が卒業設計に取り組んだ1957年は、終戦から12年目。まだまだ戦後の頹廃的風潮と厭世感が漂う世の中。文房具は量・質ともに極めて貧弱な時代であった。用紙はケント紙にインキングと決められていたが、インキングはカラスグチしか方法がない時代であった。これは失敗も多く、太・細は表現できても、微妙なグラデーションは表現できない不便さを感じていた。そこで習得しはじめていたペンシルワークのおもしろさが捨てがたく、規定は規定としてインキングはごくわずかにしようと最初から考えていた。

カラー用紙は高価なので、1枚だけとし、当時最先端技術であったフォトスタットの白黒反転焼付け方法を、先輩から倣ってスケッチを何枚か描いた。ディテールは1枚と規定

されていたが、習ったこともなく、その上参考書もなく、仕方がないので旧・東京都庁舎(丹下健三設計)のPSコンクリートの階段を現地で写しとっていった。そしてその美しさ、極精度に驚き感激し、施工会社であった戸田建設に入社するというおまけまでついた。

提出からしばらくして、かなり良い評価を受けているという噂が、どこからともなく伝わってきた。しかし、その後図面がインキングという規定に違反しているという評価もあって揉めている、という話も耳にしていた。しかし最終評定で前川國男先生の判断で第一位に決定した…、と後から聞いた。

卒業式で、賞状と確か万年筆をいただいたと思うのだが、戸田建設に入社し4月1日に任地札幌へ発ったり、その後大阪、白浜、金沢と日本各地を移動したので、万年筆は紛失

し、賞状だけが今、私の机の前に飾ってある。

絵は思いを伝える最良の手段

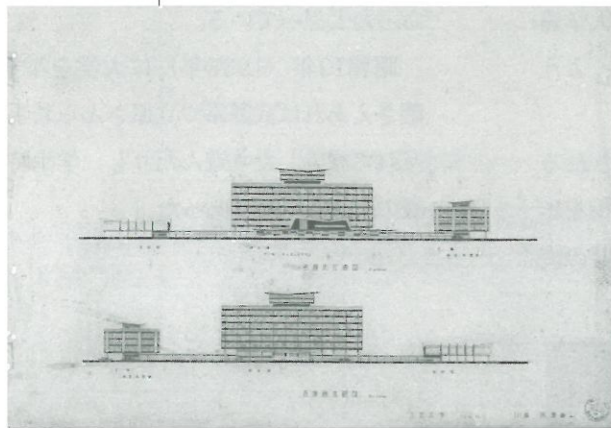
こうして今また学校から返却された実物を見ると「一生懸命やっているけど下手だなあ」……。それにもまして絵の具の発色が悪く時代を感じる。昨今はいろいろと画材も豊富で、文房具屋さんに行くのも楽しい時代である。

今、私がどんなパースを描いているかを知っていただくため、最近描いたものを蛇足ながら加えさせていただいた。最近の若者は絵が描けない人が多い。CG時代だから仕方な

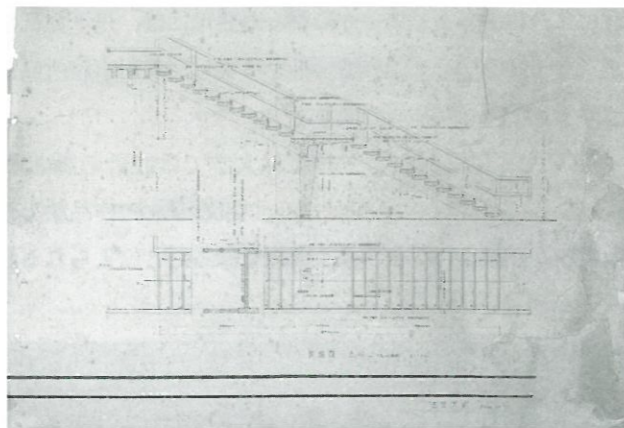
いのかもしれないが、CG画は味気ない。正確な形態を把握したければ模型がいちばん。パースは建築の雰囲気と設計者の思いを伝える手段として、また顧客の前でも描けるという点で捨てがたい魅力をもっている。

形態をしっかり頭の中で理解できれば、後はスラスラと絵になる。さらに、木や人や車や空を描き入れれば、雰囲気が出て設計者の思いが表現され、イメージパースとしてダイレクトな意志伝達手段となる。

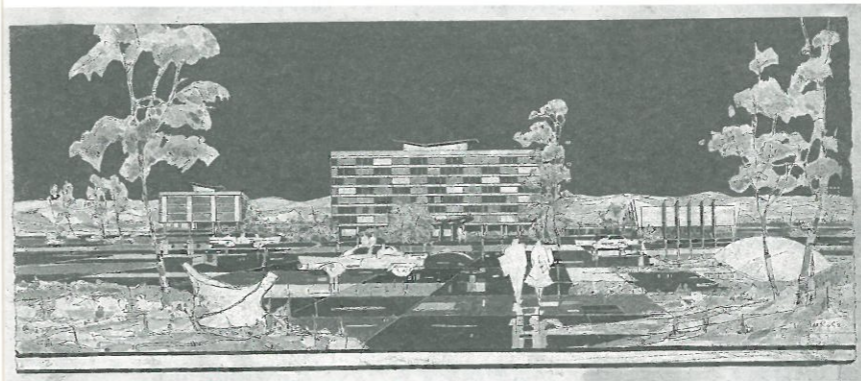
私は今でもイメージスケッチを描きつづけている。



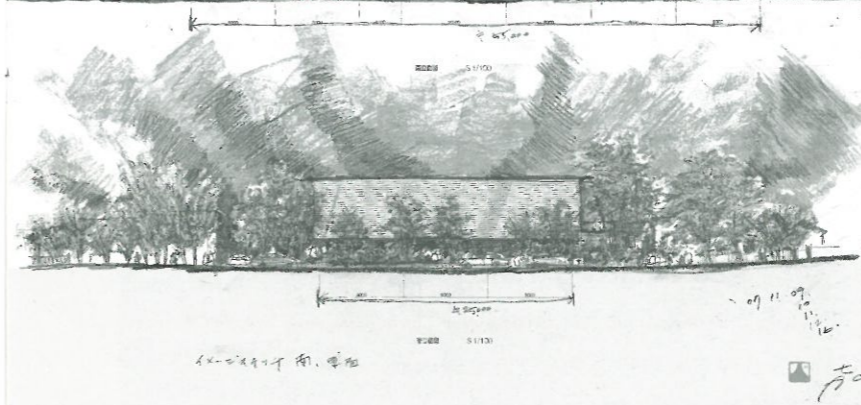
卒業設計「工芸大学」の立面図



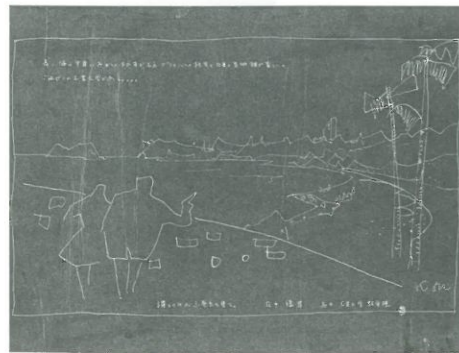
旧都庁舎の階段を実測して描いたディテール



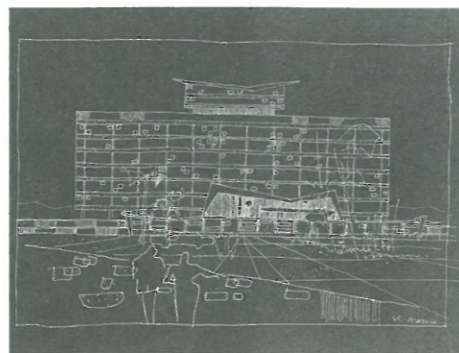
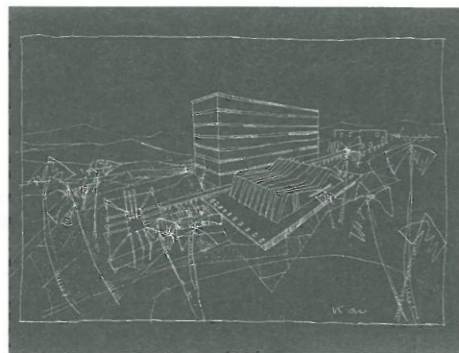
卒業設計「工芸大学」のパース



最近描いたスケッチパース



卒業設計「工芸大学」のフォトスタットによるエスキース3点



Naruse Kaichi

1936年長野県生まれ。58年日本大学理工学部建築学科卒業、同年戸田建設に入社。札幌支店、北陸支店、大阪支店を経て1961年本社設計部に配属。常務取締役建築設計統轄部長を経て、現在プリンシパルアーキテクト、戸田リフォームKK取締役。69～71年、ニューヨークのグルーゼン&パートナーズ、ニューヨーク州立大に社会留学。85～90年、日本大学理工学部講師。主な作品は、山脇学園一連の建物、三協精機一連の建物、ホテルロッテ(ソウル)、スタジオアルタ、ジャパンハウス(ニューヨーク)、プリンスプラザ(ジャカルタ)、明治生命仙台ビル、八丁堀センタービルなどがあり、京都東急ホテル、トリトンスクエア、妙見山「星嶺」、求道会館などでBCS賞受賞。池貝本社、日本橋ゆかり、アイテム武蔵野などで東京建築賞を受賞する。またBCS賞選考委員、村野藤吾賞選考委員、東京建築士協会理事、日本建築学会評議員、東京都災害判定委員などを歴任及び現任している。

## 偽装列島と化した日本

昨年6月20日、改正された建築基準法が施行され、大きな波紋が建設業界を揺るがしています。この発端となったのが耐震偽装事件ですが、「偽装事件」は建設業ばかりでなくさまざまな産業で発覚し、今や日本は「偽装列島」と化してしまいました。このような状況を改めるため、今後どの産業でも偽装が再発しないシステムづくりを進めることになるでしょう。

その結果、何をすることも煩雑な事務処理が必要となり、結果として消費者である国民一人ひとりにその負担が課せられることになるのではないのでしょうか。事実、建築確認の申請では今回の法改正によって建築主の負担する費用は増加しています。

かつて日本人は、世界中の人びとが感心する倫理観を有する国民であったといわれています。藤原正彦氏は、ベストセラーとなった著書『国家の品格』の中で、新渡戸稲造氏の著した『武士道』を引用しながら、武士道精神の復活を訴えています。

この武士道という精神性は、現代の日本人

にも多大な影響を与えていることは間違いないでしょう。本によれば、武士道とは鎌倉時代の武士の掟に由来するものとされています。しかし、もっと遡って考えると、縄文時代以前からの文明的違いによって、日本人は独特の価値観、倫理観を育んできたからこそ武士道が生まれたのではないかと私は考えています。

## 「森の文明」と「家畜の文明」

安田喜憲氏（国際日本文化センター教授）によれば、日本人は世界でも数少ない稲作漁労民族で、欧米諸国の放牧狩猟民族とは明らかに違う文明を築いてきたそうです。

安田氏は著書の中で、稲作漁労民族による文明を「森の文明」、放牧狩猟民族による文明を「家畜の文明」と称しています。「森の文明」は、森を拠点として一定の場所に留まって生活するため部落の掟や慣習を守って秩序を保つ生活が営まれ、掟や慣習は言葉によって代々受け継がれていく。

一方、「家畜の文明」は、場所を転々と移動しながら生活をするため、人との衝突が多く、

武器が発達し、約束を交わすために必要な文字も発達したと記されています。これは、「森の文明」が信用に基づくものであるのに対し、「家畜の文明」が約束に基づくものであることを表していると考えられ、この違いは現代にも見られます。

例えば、弁護士の数を比較すると、日本は欧米諸国の比較にならないほど少ない。これは、今でも日本に「信用」を軸とした生活が受け継がれている表れなのではないかと思えます。しかし、今、この文明とも言える大きな流れが崩壊の危機にあるのです。

## 「若きエンジニア」の言葉が支えに

大学3年の春、ゼミ生として倉田研究室に通うことになった私は、4年生や大学院生の先輩方とともに倉田光春先生を囲んで、顔合わせも兼ねた花見会に参加させていただきました。

当時若かった先生は、酒も入って上機嫌で、「お前たちはエンジニアだ！ エンジニアは真理を追究するものでなくてはならない。エンジニアの歌を知っているか」と言われ、多くの人が花見をしている開成山公園に響き渡るような声で「若きエンジニア」を歌われました。先生その陽気な姿と言葉は今でも鮮明に覚えています。

この言葉は、今でも私の仕事に対する精神性の礎となっていて、諦めてしまいそうになったときや挫折しそうになったときには、「俺はエンジニアだ！」と鼓舞するもうひとりの自分がいます。意地にも似たプライドが、ぎりぎりのところでいつも私を支えてくれているのです。

## 建設業がこれから果たす役割

日本の経済成長を振り返ったとき、建設業界の果たしてきた役割は大きいと思います。土木や建築の技術が発達しなければ、今日の

ような高度な社会基盤は整備されていなかったはず。それなのに、今や建設業はヒーロー役になってしまいました。

しかし、われわれは、自分たちの存在価値にもっと自信をもってよいのではないのでしょうか。特に、今後の地球環境を考えたとき、建設業の果たすべき役割は大きいと思います。これからの社会を築いていくのはわれわれであるという誇りと責任をもって、歩み続けなくてはならないと思うのです。そのとき、私たちに求められるのは「若きエンジニア」に謳われた精神なのだと思います。

そして、建設業界ばかりではなく日本全体がもう一度輝きを取り戻すためにも、一人ひとりが日本民族としての誇りをもち、信頼を裏切らない倫理観や精神性を復活させなくてはならないと考えています。

若きエンジニア  
作詞・作曲／堀内敬三

昭煥の日出づる 国こそわが祖国  
其の名をば担いて 聳ゆわが母校  
伸びゆく日本の 力は茲に  
地を拓き行く者 若きエンジニア

青春に夢あり 宇宙に真理あり  
現実と理想を 結ぶもの我等  
科学の力と 不屈の意思を  
武器として進まん 若きエンジニア

永遠の光を 現世に与うべく  
限りなき奉仕と 愛の心もて  
新たに幸ある 世界を築く  
わが腕に栄あり 若きエンジニア



Harasawa Kazuhito

1967年群馬県生まれ。90年日本大学工学部建築学科卒業、92年同大学院工学研究科修了。久米設計構造設計部主任を経て、98年原沢組一級建築士事務所（現在の構造デザイン工房）を設立、現在に至る。97年より、同大工学部非常勤講師。

## 1 はじめに・私の経歴

私は、平成元年に日本大学大学院生産工学研究科の歴史意匠を修めさせていただきました。ドイツ表現派の建築をテーマとして山口廣教授（現名誉教授）の指導のもと、近代の建築家がいかにかその職能においてユートピアを描き、それを実現する活動をとったかを分析し、ある意味の美的活動を基にした社会主義的活動を行ったのではないかと仮説を立てました。

その後、個人のアトリエ事務所を経て、1990年にAXS佐藤総合計画に入社いたしました。建築意匠担当として建築設計、地域計画に携わりまして、1997年に日本アイビーエム株式会社（以下IBM）に入社しました。同社において、建築デザインとIT技術の融合を目指して、インテリジェントビル、コンピューターセンター、金融機関の新規チャネル店舗開発、プロダクトデザインなどに携わらせていただき、現在に至ります。

## 2 IBMでの業務紹介

1997年に組織設計事務所より移籍した当初驚いたことは、IT技術、特に業務に密接に関係するPCやその上で活躍する各種ミドルウェアや、コラボレーションツールの充実とそれを生かした新しい働き方（work style）の実践をIBM自ら実施していたことでした。

顧客の満足度を少しでも向上させていただくためにIBMは近年だけでも大きく5回のwork style変革を行っております。現在推進中のODWS（on demand work style）はProductivity（生産性）/Collaboration（協働力）の充実を目指し、「One Teamの実践」、「Virtual Officeの推進」の施策を実施しております。「時間と場所にとらわれない自由な働き方」を通して、顧客の訪問時間（Customer face time）の増加、品質とスピードの向上を図る努力を日々行っております。

一方「ものづくり」の観点でのいちばんの驚きは、「施設を経営の資源のひとつとしてと

らえた」FM（ファシリティ・マネージメント）を実践した施設づくりをIBMが実行していたことです。FMの目標は「品質」「財務」「供給」の観点にあります。（註1）

その考え方に基づいた施設づくりを社内施設に生かしていました。また社内には「Sell what we use/Use what we sell」という考え方があります。自社内にて、自社の各種サービス/プロダクトを自ら利用して、そのtry & errorを熟知した上で顧客に提供するという基本姿勢です。その考え方に基づくサービスのひとつが2007年度建築学会作品選奨受賞のマブチモーター・グローバルヘッドクォータープロジェクトです。

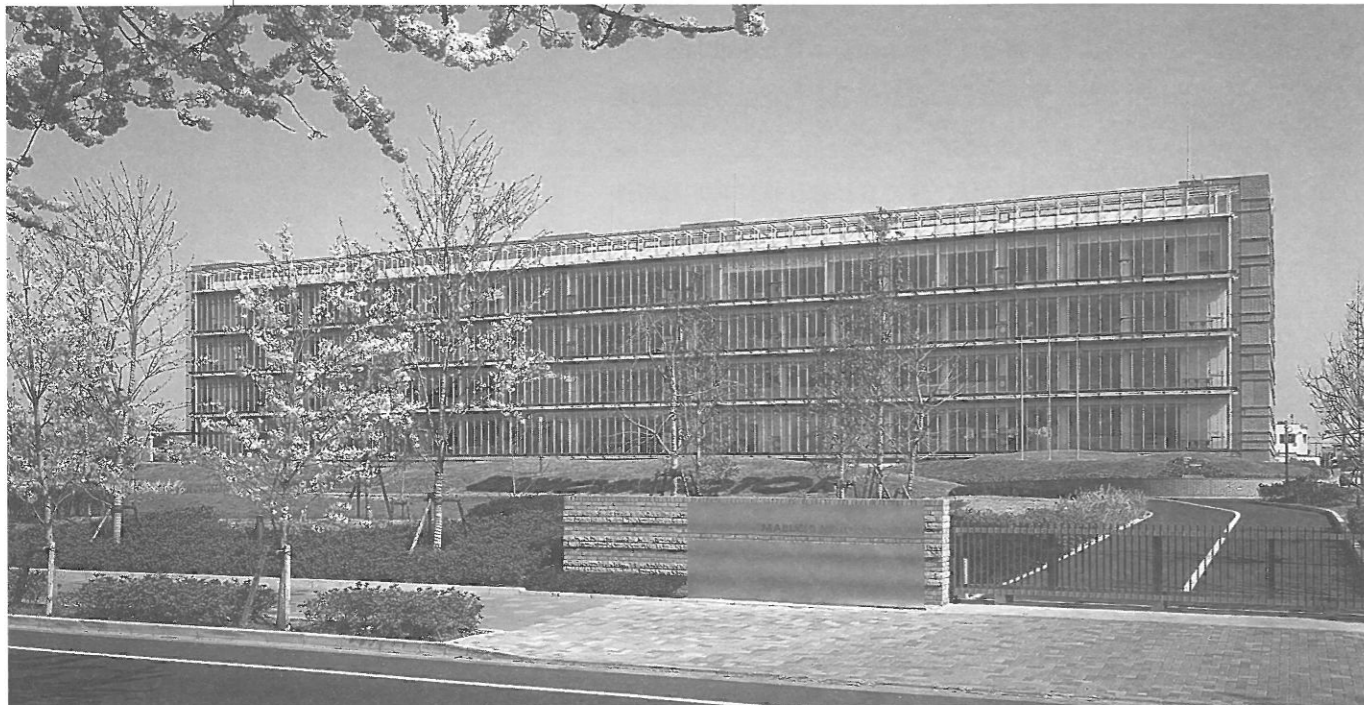
## 3 マブチモーター・プロジェクトのご紹介

敷地面積約4万㎡、延床面積約2万㎡、地下1階地上4階のSRCの建物です。企画段階に3カ月をかけ既存施設調査や社員行動実態調査/意識調査等を実施し、設計要件を詳細に詰めました。その後の基本・実施設計に15カ月を要し、2004年9月に一期工事が完成いたしました。

特徴的であったのは、その推進スキームと推進手法です。弊社が元請の統括PMとして企画段階のファシリティ・コンサルティングやその後の基本・実施設計、施工各社選定のRFP（Request for proposal）の実施、及び現場監理を推進いたしました。そこには協力いただいた各社との協業の成果がありました。

企画段階でのトーマツコンサルティング、設計段階の日本設計をはじめとする業界の第一人者全員の力を十分に引き出し、IBMチームとしてのサービス内容を最大限に高めるリーダーシップを発揮して顧客へご提供することができたことが、いちばんの特徴であると考えております。このようなteaming/collaborationが、一般的な施設建設プロジェクトとは違う価値を生み出し、学会作品選奨受賞につながったと考えております。

施設の特徴は、免震構造によるBCP（Business Continuity Plan）を重視した本社施設としての性能確保と、中央アトリウムを挟んだ無柱の1500㎡のオープンオフィス・エリアです。またダブルスキンの採用による執務室熱環境対策、妻側レンガ壁による外部負荷軽減、軀



2007年度の日本建築学会作品選奨受賞を受賞したマブチモーター・プロジェクト



災害対策用の銀行ATMを搭載した特殊車両



物流倉庫をコンバージョンしたアスクルの新社屋

体蓄熱と合わせた環境対策によりCASBEEのSクラスの性能を有しています。

詳細は『新建築』2004年12月号に掲載されていますので、あわせてご覧いただければ幸いです。

#### 4 「新しい建築家像」を求めて

私は上記のマブチモーター・プロジェクト以外に、災害対策用の銀行ATMを搭載した特殊車両の開発や、アスクルの新社屋を築後20年経つ物流倉庫をコンバージョンしたデザイン（2001/2003年度のグッドデザイン賞受賞）、最近では大型の本社移転プロジェクト（対象規模は6000名/4万㎡）の施設デザインと全体統括PMを担当しております。

これらどのプロジェクトも新しい建築家像を模索して、ITとの密接な連携とstrategic teaming/ strategic collaborationを念頭において推進しております。

本年2月22日に、生産工学部建築工学科卒業設計審査会にゲスト審査員として招聘いた

だきました。20年ぶりに母校の大久保キャンパスを歩き学生時代に思いを馳せると、歴史意匠研究室で教を請うた論理性の追求と、生産工学部での実証的な教育の数々でした。建築実験など、学生時代はなぜこんな地味なことをさせられるのか分かりませんでしたが、卒業してからの自分の技術力の基礎となっていることを今は実感しています。コンクリート強度の試験、木材の引っ張り試験、騒音測定の実験など、その実証的経験は他の教育機関では受けられなかったのではないかと感じております。

ぜひとも卒業生、在学生の皆さんには、生産工学部での教育に誇りをもって建築業界にて活躍されることを祈念いたします。輝ける未来に向かって、既存の硬直した考え方に縛られず、卒業後の職業、Roll/mission＝職能は自ら創造すべきと考えます。

私は既存の「建築家」像にとらわれず、時代が求める経営に直結できる施設づくりのプロになることを目指しています。皆さんもがんばってください。



**Maeda Keisuke**  
1965年群馬県生まれ。89年日本大学生産工学研究科博士前期課程修了。90年AXS佐藤総合計画に入社。97年退社後、日本アイビーエムに入社。現在、日本アイ・ビー・エムIMSファシリティー・マネージメント・サービスFM技術推進部長、ICPコンサルティング。1999年～2000年 慶應義塾大学大学院SFC研究所訪問研究員。工学修士、一級建築士、日本建築学会会員、認定ファシリティーマネージャー、認定コンストラクションマネージャー。主な受賞は、2001、2003年度のグッドデザイン賞、2003、2005年度の日経ニューオフィス賞、日本免震構造協会賞、プレストレストコンクリート技術協会賞、2006年度のJIA環境建築賞、2007年度の日本建築学会作品選奨賞。

註1 『総解説ファシリティーマネジメント』（日本経済新聞社）より

### 第35回大阪桜門建築会総会及び懇親会

平成20年1月25日(金)「以和貴荘(地方職員共済組合大阪宿泊所)」において開催され、学内より片桐正夫教授(理工)、倉田光春教授(工)、坪井善道教授(生産)が招待いただき、各々の

学部・学科の近況を報告した。また、同会には大阪在住の桜建会会員約30名弱が参加され懇親を深めた。

なお、総会においては新会長に伊藤治正氏が選出された。(坪井善道)

### 「桜建彩の会」で講演・見学会及び懇親会を開催



支部設立(昨年7月)後初めての事業として「美しい打放しコンクリートを造るためにどうするか」と題した講演(理工学部建築学科中田善久准教授)、打放しコンクリート造の「埼玉県立武道館」見学及び懇親会を1月26日(土)に開催。講演・見学会には18名、懇親会には20名の方が参加しました。

中田善久准教授の講演は、自ら施工した建物の紹介、仕上り面の評価方法を含めた広範囲の内容であり、美しい打放しコンクリートを造るためには、

型枠・鉄筋及びコンクリート三位一体となった施工体制が大切であることを説明されました。

夕方からの懇親会には、桜建彩の会、日本建築学会会長の斎藤公男先生(理工学部建築学科教授)も参加され、先生の研究室OBからの昔話を含めた自己紹介を中心とした楽しい会となりました。今後は、ゴルフなども企画したいと考えております。

(飛坂基夫/理工学部建築学科昭和42年卒、飛坂技術士事務所所長)

### メールアドレス登録のお願い

現在、会員向けサービスと会員相互の絆を強めるため、桜建会の事業・催し・会合等に関する最新情報をメールにてご案内する体制を整えております。お名前と会員番号(アルファベットを含む7桁)を下記までメール送信して、アドレスをご登録くださいますようお願いいたします。

**桜建会事務局(会員係) kaiin@okenkai.jp**

あわせて、現住所・勤務先などの変更がございましたら訂正内容をご記入下さい。電話・FAXでも承ります。

### 新入特別維持会員のご紹介

新規入会者 氏名/卒業年/勤務先(平成19年11月16日～20年2月22日 入会順) 3名

吉村昌明 理工建-40 安藤建設 杉浦雄一郎 生産工学-49 杉浦建設 黒田清行 理工建-39 東京建築士会

桜建会報 NO.81 2008-March  
発行人 加藤幸三  
編集 桜門建築会広報委員会  
〒101-8308 千代田区神田駿河台1-8-14  
日本大学理工学部内

広報委員会  
委員長 坪井善道(生産工学部建築工学科)  
副委員長 広田直行(生産工学部建築工学科)

委員 佐藤慎也(理工学部建築学科)  
山本和清(理工学部海洋建築工学科)  
小松博(生産工学部建築工学科)  
野内英治(工学部建築学科)  
羽入敏樹(短期大学部建設学科)  
西山麻夕美(フリー編集者)  
平野香奈子(千葉県庁)  
五十嵐賢博(総建策研究所)

#### 桜建会事務局

住所・所属の変更、クラス会の開催、投稿、会費、名簿など桜建会全般についてお気軽にご連絡、お問い合わせください。  
TEL 03-3259-0649 FAX 03-3292-3216  
E-mail oken@arch.cst.nihon-u.ac.jp  
ホームページ http://www.okenkai.jp/  
専任/庄野弘子  
非常勤/関根光枝、大木明子、星野麻衣子  
業務時間/AM10:00～PM5:00(月～金)

## 齋藤賞・加藤賞・桜建賞 平成19年度受賞者一覧\*受賞作品の紹介は次号に掲載いたします

### 齋藤賞

|   |
|---|
| <b>宮崎紘光</b> (理工建築/修士論文)<br>「繊維補強モルタルを用いた耐震補強接合部の性能評価実験」指導/教授・白井伸明   |
| <b>長谷川絢子</b> (理工建築/修士論文)<br>「リターンバイパス方式を採用したホールの壁式置換空調の設計法に関する研究 —実測による温熱・空気質特性の評価とCFD解析による境界領域高さの検討—」指導/教授・早川眞 |
| <b>直井豊</b> (生産工学部/修士論文)<br>「せん断変形を受けた乾式外壁材取り付けくぎの引き抜き抵抗に関する研究」指導/教授・松井勇   |
| <b>菊地弘悦</b> (工学部/修士論文)<br>「竹補強セメントモルタルの基礎的性質」指導/教授・出村克宣   |

### 加藤賞

|  |
|--|
| <b>大槻達夫</b> (理工海建/修士論文)<br>「地域的視座からみた灯台の役割に関する研究」指導/教授・桜井慎一                                |
| <b>松本惇</b> (理工海建/修士論文)<br>「鉄筋コンクリート造柱の軸力支持限界に関する実験的研究」指導/教授・安達洋、教授・中西三和                    |
| <b>山崎京子</b> (理工海建/修士論文)<br>「建築空間における音環境・視環境評価手法に関する研究 —二つの異なる呈示刺激による生理・心理反応の検討—」指導/教授・堀田健治 |

### 桜建賞

|  |
|--|
| <b>辻 紗矢香</b> (理工建築/卒業論文)<br>「認知症高齢者グループホームにおける座席配置から考察した建築計画に関する研究」指導/専任講師・八藤後猛                                    |
| <b>大久保徳朗、小山翔、牧良太</b> (理工建築/卒業論文)<br>「DM (ダイナミック・マス) 要素を利用したBMDシステムに関する基礎的研究 —BMD設計法の構築と実験による検証—」指導/教授・石丸辰治、准教授・古橋剛 |
| <b>水野佑理、山田達也</b> (理工建築/卒業論文)<br>「メンブレン式切頂20面体ドームの施工法の提案と構造特性に関する基礎的研究」指導/教授・齋藤公男、教授・岡田章                            |
| <b>伊沢佑、櫻井久巳</b> (理工建築/卒業論文)<br>「照明色の影響を考慮した色盲の見え予測プログラムの開発」指導/教授・関口克明  |
| <b>市村美奈子、上野美佳子、柳澤優行</b> (理工建築/卒業論文)<br>「多様な主体の連携によるまちづくり活動の展開に関する研究 —栃木県栃木市における歴史的建造物を活かしたまちづくりを事例として—」指導/教授・根上彰生  |
| <b>北川健太</b> (理工建築/卒業設計)<br>「FOUNDATION Ohashi Re:Redevelopment project」指導/准教授・佐藤光彦                                 |
| <b>阿部博音</b> (理工海建/卒業論文)<br>「津波襲来地に見られる市町村及び住民の減災体制構築に関する研究」指導/教授・畔柳昭雄  |
| <b>安岡菜緒</b> (理工海建/卒業論文)<br>「臨海公園における喫煙所の適正配置に関する研究 —東京・横浜の4公園を対象として—」指導/教授・桜井慎一                                    |
| <b>藤尾慎太郎、中田春奈</b> (理工海建/卒業論文)<br>「潮流・海流発電用ダリウス型水車の流体力特性に関する基礎的研究 —その2:翼素運動量理論の適用によるトルクの推定—」指導/教授・増田光一、専任講師・居駒知樹    |

|   |
|---|
| <b>野毛隼人、渡邊剛士</b> (生産工学部/卒業論文)<br>「重曹プラストによる落書き・貼り紙の除去方法に関する研究」指導/教授・松井勇                                   |
| <b>宮下幸子</b> (生産工学部/卒業論文)<br>「植物が付着・生育可能なコンクリートの品質に関する研究 —水セメント比の違いが植物の付着に及ぼす影響—」指導/准教授・川島晃、准教授・湯浅昇        |
| <b>大井悠太郎、久保雄一、坂本大輔、早川知宏、日向野勉</b> (生産工学部/卒業論文)<br>「ごみ熔融スラグと再生粗骨材を併用した鉄筋コンクリート梁部材の付着性状」指導/教授・櫻田智之、専任講師・師橋憲貴 |

|   |
|---|
| <b>小倉奈央子</b> (生産工学部/卒業設計)<br>「陸⇄海 —石垣から成る風の集落—」指導/教授・曾根陽子、教授 (研究所)・中村好文 |
|---|

|  |
|--|
| <b>小倉大助</b> (生産工学部/卒業設計)<br>「シモキタの指紋 —下北沢再開発における街のありかたに関する提案—」指導/教授・浅野平八 |
|--|

|  |
|--|
| <b>近藤喜尚</b> (工学部/卒業設計)<br>「つながるみらい —中核都市における生涯学習施設のネットワーク形成—」指導/准教授・松井高則 |
|--|

|   |
|---|
| <b>安齋秀亮、後藤真治、佐藤圭太、有岡大輔</b> (工学部/卒業論文)<br>「短繊維補強ポーラスコンクリートの開発」指導/教授・出村克宣 |
|---|

|  |
|--|
| <b>田中文崇</b> (工学部/卒業論文)<br>「制振装置に関する基礎的研究 —U字形水槽によるスロッシングダンパの実験と効果確認—」指導/准教授・Buntara S. GAN |
|--|

|   |
|---|
| <b>比佐剛史</b> (工学部/卒業論文)<br>「一般開放性を重視した劇場・ホールの利用者空間に関する研究 —さくらホールと茅野市民館—」指導/専任講師・浦部智義 |
|---|

|  |
|--|
| <b>鈴木克昌、川俣裕一、後藤正和、内田有香</b> (工学部/卒業論文)<br>「アーケードのある街路の空間構成に関する研究 —仙台アーケード2007—」指導/教授・三浦金作 |
|--|

|  |
|--|
| <b>針谷未花</b> (短大/卒業制作)<br>「谷中路地マチ —どのミチゆこう—」指導/教授・小石川正男、准教授・田所辰之助 |
|--|

|  |
|--|
| <b>保坂裕梨</b> (短大/卒業制作)<br>「都市温帯 —LOHAS集落と地域コミュニティ—」指導/教授・小石川正男、准教授・矢代眞己 |
|--|

## 学部ニュース

### 理工 海洋建築・トピックス

◎海洋建築学科3年生の島田かおりさん(横内・岡田研究室所属)が、景観デザインコンペ「景観開花。」(主催/土木学会景観・デザイン委員会、東北建設協会ほか)において「特別賞」(オーディエンス賞)を受賞しました。

◎Forbes誌2月号(日本版)に海洋建築学科畔柳昭雄教授のアルミニウムによる構造物の研究が紹介されました。

◎Forbes誌3月号(日本版)に海洋建築学科堀田健治教授の海藻の研究が

紹介されました。林溪清氏の取材によるものです。

◎平成19年度第51回理工学部学術講演会にて、優秀講演賞を当学科学生が受賞しました。受賞者と研究テーマは以下の通りです。

**海洋建築部会**  
大西淳(桜井研究室所属)  
「橋詰広場の利用可能性に関する研究—(その3)全国202か所の行政機関に対するアンケート調査結果—」  
花田龍人(増田・居駒研究室所属)  
「港湾内の船舶・浮体式建築物を対象

とした海域津波ハザードマップに関する基礎的研究」

**構造強度部会**  
岡田祐輔(安達・中西研究室所属)  
「曲げ破壊する鉄筋コンクリート造はりの力学的性能に及ぼす寸法効果に関する研究:その3 曲げ耐力とせん断耐力が拮抗する場合」

**都市・交通計画部会**  
山下泉(横内・岡田研究室所属)  
「景観法に基づく景観地区の実態に関する研究—(その2)建築物の高さ・壁面の位置・敷地面積の制限について—」





## トピックス

◎永年にわたって本学学生の教育にご尽力された渡澤正典先生が、平成19年9月27日付けで定年退職されました。定年後も非常勤講師として教育に携われます。

◎本年2月5日、6日、7日と三日間にわたり、第一回業界セミナーが開催されました。昨年より一日多く、参加企業も625社と昨年を大きく上回りました。また参加学生が延べ6060人と大盛況でした。

◎今年も例年通り春休み中およそ一月をかけて、建築学科CAD施工図研修を実施しました。



## 建築・トピックス

◎榎並昭名誉教授が、平成19年秋の叙勲において、教育研究の功績により「瑞宝中綬章」を受章した。

◎理工学部科学技術史料センター CST MUSEUM（船橋キャンパス5号館）において、第4回特別展「空間と構造の交差点 空間構造デザイン研究室による Archi-Neering Design 1967-2007」が開催された。この展覧会は、「日大理工のちから」と題された連続企画の第1弾であり、空間構造デザイン研究室の活動の軌跡を、同研究室が構造デザインを担当した船橋キャンパス内の施設を中心に紹介するもの。会期は6月末まで延長される予定。

◎2007年11月9日～25日に茨城県取手市で開催した「取手アートプロジェクト2007」の「メタユニット\_M1プ



▲アートプロジェクト「3×M1=キョテン」

ロジェクト」に、佐藤慎也研究室がゲストプランナーとして参加。ユニット住宅セキスイハイムM1を再利用した建築や風景への提案に対し、『3×M1=キョテン』と題した会場拠点の計画を行った。ここでは、インフォメーションセンターやカフェなどを設置し、各種イベントを開催。構造設計を宮里直也非常勤講師が担当した。

## 生産 学会支部コンペで 工 優秀賞を受賞

昨年11月17日に行われた第9回提案競技「美しくまちをつくる、むらをつくる」(主催/日本建築学会関東支部)において、生産工学研究科建築工学専攻博士後期課程2年杉本弘文君(川岸研究室)、博士前期課程1年相澤秀彰君、堀内里美さん(坪井研究室)のグループ作品が優秀賞を受賞した。作品タイトルは「地域固有の風土を育む風景の創造 KOZAKI-SCAPE」。提案した内容は、神崎の有する多様な地域資源(豊かな自然環境や豊富な農産物、伝統的地場産業)や地域特有の文化・歴史

的資産を結び、繋ぎ、活用していくことで新たな価値を創出し、神崎固有の魅力(観光資源)として発信するものとした。それとともに、「農」と「交流」・「コミュニティ」をキーワードとして神崎のヒト・モノ・コトを育み、ゆったりとした時間の流れる田園の風景・生活風景、歴史的遺産と緑が調和した風景が連鎖し、人と人、人と活動、人と空間、人と時間の相互浸透(共生・育生)・相互補完と Community Support による固有の魅力をもった美しいまち・むらを創出する方策を提案している。



## 短大トピックス

◎小石川正男短大教授、高田康史短大副手、横村隆子短大非常勤講師は、日本建築学会関東支部主催 第9回提案競技「美しくまちをつくる、村をつくる」(千葉県神崎町)にて、最優秀賞を受賞した。

◎本年1月10日～1月23日まで西安科技大学から劉加平教授と桑国臣、其曉琳大学院生が当学科に上席客員研究員及び交換留学生として訪問。また、商洛学院からは同年1月14日～1月26日まで、劉濤助教が文部科学省国際化推進教育の交換留学生として滞在した。いずれも、技術センター視察、住宅施設見学、共同研究打ち合わせ、公開講義など意義深い交流ができ、今後、西安建築科技大学との当学科教職員・学生諸氏の派遣に関しても実施の方向で、意見交換が行われた。



◀「地域固有の風土を育む風景の創造」の模型